

PHASE プログラムに参加して

長崎大学多文化社会学部 2 年

私が PHASE プログラムを通して感じた 1 番の学びは、ケニアと日本に関わらず諸外国同士の交流はどこの国であるかに関わらず両者の学びに繋がる、ということです。

ユウコさんと Aggrey さんのプレゼンテーションで仰っていた「ケニアと日本相互に学びを得る事こそが PHASE プログラムのゴール」という発言を聞いて、腑に落ちました。

ケニアは日本の援助から国や地域の発展が望まれ、一方日本は、ケニアの現状を知ることでも更なる開発の手がかりを知ることができます。

また、他国の現状は、自分の目で確かめないと知ることが出来ない、ということも新たな気づきでした。元々アフリカの文化に興味があり、独学でケニアの文化や公用語であるスワヒリ語について勉強していましたが、実際現地の方々はスワヒリ語と英語を混ぜた「シェン語」を話していることは実際に現地に滞在してはじめて知りました。アフリカが日本から遠く、どんな雰囲気なのか想像もつかない未知の地域でしたが、想像よりも遥かに彼らはフレンドリーで、寧ろ日本人同士よりもすぐ友達になれることに驚きました。

他にも、話したいことが英語で出てこなくて、翻訳機に頼ったりすると、調べている間の時間で会話の意欲がお互い無くなるので、改めて言語力の重要性を感じました。

今回の参加者は、日本側ケニア側共に異なる分野の研究者であったので、様々な視点から物事を俯瞰していて、今回のような交流プログラムで多分野の研究者が交流することでより多くの発見が生まれることにも気づきました。

従って、PHASE プログラムのような交流プログラムは、両者の発展や気づきと共に、互いの国の友好にも繋がることから、非常に有意義だと思いました。私は、将来観光業や地域創生業に携わることを検討しているので、PHASE プログラムでの様々な経験で得た学びは将来働く際に大いに貢献し得ると考えます。これからも PHASE プログラムでの経験や気づきを忘れずに、多くの物事に目を向けて、俯瞰的な視野を持って国と国の架け橋になる人材を目指します。